

大阪泉州桐箆笥

【産地組合】大阪泉州桐箆笥製造協同組合

（産地紹介）

農業をするかたわらに行われた、近所で採れるキハダやキリの木を使った、箱等の簡単な指物作りは、江戸時代中期に始まったと言われています。江戸時代後期から明治時代にかけて一大産地を形成しました。キリの柾目（まさめ）を活かし、木釘と各種組み接ぎ（くみつぎ）技法を凝らした組立から、磨き着色に至るまで、伝統技法を脈々と伝えています。



使用する桐材は1~2年かけて十分自然乾燥させてから使うので、アクが出ることはありません。桐材は20mm以上の厚い無垢板（むくいた）です。前面には、年輪の細かい木目が真っ直ぐ通った桐の柾目板を揃えて、高度な技法である「矧（は）ぎ加工」を施してあるので見栄えがします。

良質の桐材を用いた大阪泉州桐箆笥は、使用する桐材が厚く、角を丸く削った胴丸型と呼ばれる箆笥が多いことから重厚な雰囲気を持っており、また、組手の数が多いこと等、つくり、仕上げが丁寧なことを特徴としていて、特注品としての需要が多い産地です。

桐は湿気の多い時には水分を吸い、乾燥時には水分を出す性質があり、火災の際には水を吸って燃えにくく、「身を焼いて中身を救う」という衣服の保存に最適の性質を持っています。また伸縮や狂いが少なく、長年使用しても再生により、新品同様になるなど、昔から「桐箆笥は一生もの」と言われています。